

地域連携通信

vol.5
2026
3月発行

Jichi Medical University
Saitama Medical Center

副センター長のご挨拶 2040年問題と地域医療構想



自治医科大学附属さいたま医療センター
副センター長 山口 敦司

地域の皆様におかれましては、平素よりの診療連携にご理解をいただき誠にありがとうございます。

日本の人口構造で最もボリュームが大きい層は、1947～1949年生まれの団塊世代、次いで1971～1974年生まれの団塊ジュニア世代です。2040年には、団塊ジュニア世代が65歳以上となり、高齢者人口はピークを迎えます。そして団塊世代は85歳を超えています。その一方で、高齢者を支える労働人口は少ないままと予測されます。少子高齢化は日本社会の長期的な傾向ですが、高齢者人口がピークに達する2040年をピックアップして、「2040年問題」として改めて注目されています。この急速な高齢化の進展による医療需要・介護需要の大きな変化が見込まれる中、医療や介護を必要とする地域の方々が、できる限り住み慣れた地域で必要なサービスを受けられる体制を確保することが求められており、政府および各地方公共団体などから『地域医療構想』が発信されております。

『地域医療構想』は、医療機能の分化・連携・充実を進め、急性期、回復期、在宅医療等まで良質かつ適切な医療が効率的に提供される体制を構築し、地域の方々が住み慣れた地域で必要な時に、必要なサービスの提供を受けられる体制の確保を目指すものです。

当センターは『地域医療構想』における役割として、地域医療支援病院の認定を受け、下記のような病院施設・設備を共同で利用できる体制作りを目指しております。

- ① 救命救急センターとして3次救急医療機関の指定を受け、24時間体制で地域の救急医療に貢献しております。医師が現場に急行するドクターカーの運行・重症患者の救急搬送のためのECMOカーの運行・病病間患者搬送用救急車の運行などを行っております。
- ② 特定病床（ICU/CCU；20床・EICU；8床・HCU；20床）を運用し、循環器診療を代表とする高度急性期医療に関わる診療機能の充実を図っております。
- ③ 地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、がん化学療法センターの充実やがん放射線治療機器を増設するとともに、がんゲノム医療を提供しております。
- ④ 地域周産期母子医療センターに認定されており、母体及び胎児のハイリスク妊娠に対する医療、新生児医療を提供しております。

『地域医療構想』が機能を発揮するためには、診療圏内の診療担当施設間における情報共有が最も重要な命題であります。地域のニーズに合った病床機能や診療科の見直し、病院間連携の方針の決定などに関しまして、地域の医療機関・在宅医療従事者の方々と連携を深め、急性期-慢性期-在宅のシームレスな医療構築を目指し、ネットワークの構築を推進することが必要かと思われまます。診療圏内の先生方やスタッフの皆様におかれましては、『地域医療構想』実現のため、今後ともさらなるご指導・ご鞭撻を賜ることが出来れば幸いです。

contents

副センター長のご挨拶……………	1	診療科紹介 脳神経内科……………	2
診療科紹介 脳神経外科……………	3	クラウドファンディング 経過報告…	4

脳神経内科



脳神経内科 科長 崎山 快夫
病棟医長 林 夢夏

当科は神経内科専門医資格を有する常勤医師4名と、シニアレジデント1名の体制で、脳卒中、認知症、パーキンソン病といった要介護の原因疾患の他、神経感染症（髄膜炎、脳炎）、てんかん、神経免疫疾患（多発性硬化症、ギラン・バレー症候群）、筋疾患などあらゆる神経疾患に対応しています。介護保険・身体障害など福祉面の背景も考慮し診療にあたっており、地域の医療機関、訪問看護ステーション、介護施設との連携を重視しています。

埼玉県の難病診療連携拠点病院に指定されており、難病診療連携も行なっています。

アルツハイマー病の進行予防薬であるレカネマブ、ドナネマブの投与も実施しています。

<診療実績>

- 1) 新来患者数・再来患者数・紹介率
 新来患者数 867 人
 再来患者数 7,843 人

- 3) 実働入院ベッド数 15.9床/日
 年間入院患者実数 386人/年
 平均在院日数 15.0日

- 2) 入院患者数（病名別）

病名	患者数
脳血管障害	214人
免疫関連性中枢神経疾患 (MS、NMDA受容体脳炎など)	28人
神経感染症 (細菌性・ウイルス性髄膜炎・脳炎など)	15人
神経変性疾患 (パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症など)	38人
末梢神経疾患 (ギラン・バレー症候群、CIDPなど)	11人
筋疾患 (筋炎、皮膚筋炎、ジストロフィーなど)	14人
発作性疾患（てんかん、片頭痛など）	31人
代謝	14人
外傷、骨格	0人
先天性	0人
腫瘍	1人
その他	20人
合計	386人

- 4) その他の治療症例・数

・ホスレボドパ/ホスカルビドパ持続皮下
 注療法 5例

- 5) 主な処置・検査

・脳波 132件
 ・末梢神経伝導検査 208件
 ・誘発電位 28件
 ・針筋電図 34件
 ・平衡機能検査 11件
 ・神経筋生検 2例

脳神経外科



手術風景①
(従来からの顕微鏡手術)



手術風景②
(最近はやりの外視鏡を用いた手術：顕微鏡ではなく高解像度3Dモニターを用いて手術を行っている。術者は3D眼鏡を使用。)

脳神経外科 教授 草鹿 元

科長で教授の草鹿^{くさか}元^{げん}と申します。皆様どうぞよろしくお願ひいたします。当院脳神経外科は吉野^{よしかず}義一教授率いる脳血管内治療チームも含め総勢10名体制で、24時間365日脳卒中を含めた緊急手術に対応しております。当科は「死角無き脳神経外科治療」をモットーとし、外傷、脳腫瘍、脳卒中、脊髄、機能疾患などいかなる疾患でも診療の対象としており、最新の診断機器、手術機器を使用し、安全で質の高い治療を行っております。診断機器ではAI搭載の320列CTや3テスラMRIなどで正確に診断、手術ではカールツァイツ顕微鏡や外視鏡、ブレインラボの神経ナビゲーションシステム、オリンパスの神経内視鏡システムなど最新設備を備え、またほぼ全ての手術で電気生理学的モニターを併用して安全かつ正確な手術を心がけています。電気生理学的モニターとはあまり聞きなれない言葉かもしれませんが、脳や脊髄は精密な電子回路と同じですので、全身麻酔で意識が無い状態でもこの精密回路が傷つかないように、微弱な電気信号や筋電図を確認しながら手術をしております。二重三重の安全装置を駆使して手術をしているわけです。また、脳血管内治療チームも非常に信頼できるパートナーで他院では治療困難な巨大な脳動脈瘤や深部の脳動静脈奇形なども日常的に治療しており、また開頭手術で大量出血が予想されるような大きな脳腫瘍も、摘出手術前に血管内手術で上手に腫瘍血管を塞栓してくれるので、開頭チームも出血をさせずに、脳腫瘍を迅速かつ安全に摘出することができます。また脳動脈瘤や頸動脈狭窄症などは、患者様への治療侵襲を考慮し、当科では血管内手術をfirst choiceとしており

ます。一方、小さな脳腫瘍などは、さいたまガンマセンター小原琢磨医師が当科外来でも診療をしているので、気軽にガンマナイフ治療をお願いすることもできます。一方、脊髄脊椎疾患については、年間80例近く行っており、脳神経外科としては脊髄脊椎疾患の治療実績が多いことも当科の特徴です。脊髄脊椎疾患と聞くと「整形外科じゃないの!？」と思われる方も多いかもしれませんが、当院では脳神経外科が主に脊髄脊椎疾患を担当しており、外傷（椎体圧迫骨折など）や変性疾患（椎間板ヘルニア、腰椎すべり症、腰部脊柱管狭窄症、頸椎症など）、脊髄腫瘍、脊髄血管障害など、あらゆる脊髄脊椎疾患の治療を積極的に行っております。お陰様で最近では、近隣の整形外科の先生方からも沢山の症例をご紹介いただいております。手術数は毎年増加の傾向にあります。当科はこの10年で総手術件数が2倍以上に増えており、これは地域医療を担っておられる開業医の先生方や一般病院の先生方、またさいたま市やその近郊の患者様からの信頼の証と自負しております。今後とも自治医科大学附属さいたま医療センター脳神経外科をどうぞよろしくお願いいたします。

脳腫瘍	73
脳血管障害	182
脊髄脊椎	78
頭部外傷	47
その他	74
総数	454

2025年（1-12月）当科の手術数と内訳

クラウドファンディング 結果報告

当センターのクラウドファンディングプロジェクトに対し、多くの皆さまから温かいご寄附とご支援をお寄せいただきましたこと、改めて心より感謝申し上げます。皆さま一人ひとりの想いが積み重なり、自治医科大学全体として初めてのクラウドファンディングの成功、そして高規格救急自動車の導入という大きな取組を現実のものとすることができました。

令和8年2月5日、皆さまのご支援を受け、救急車は無事に納車されました。現在は、緊急走行を実施するための申請手続きを進めており、関係機関と連携しながら、安全で確実な運行開始に向けた最終準備を行っております。令和8年4月1日からの運行開始を目標に、走行テストや運行体制の整備を着実に進めているところです。

この救急車は、当センターでの治療を終え、全身状態が安定した後も継続的な入院が必要な患者さんを近隣の医療機関へ搬送することを主な役割の一つとしています。円滑な転院搬送を行うことで受け入れ病床を確保し、より多くの救急患者さんを受け入れられる体制の維持に努めてまいります。

一方で、本車両は、地域の医療機関から当センターへ、より高度な医療を必要とする患者さんを受け入れるための搬送にも活用していく予定です。医師・看護師・救急救命士をはじめとする多職種で構成されたチームが、安全かつ迅速な病院間搬送を担うことで、埼玉県・さいたま市域の救急医療を支える中核施設としての機能を一層強化してまいります。

また、多数のご寄附をお寄せいただいたことで、車両本体の整備にとどまらず、追加の医療機器整備が可能となりました。DMAT等の活動も見据え、バックボードやスクープストレッチャーといった搬送資機材、救急車搭載用のポケットエコーなど、複数の最新機器を整備することが決定しております。これにより、平時のみならず災害時においても、地域医療に貢献できる体制が整いつつあります。

今後は、地域医療構想に基づき、当センターの病院間搬送先および受け入れ元となる連携医療機関をさらに拡充し、地域全体で患者さんを支える医療連携の強化を進めてまいります。皆さまから託されたご厚意を原動力に、地域から信頼される救急医療の提供に引き続き全力で取り組んでまいります。今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



自治医科大学附属さいたま医療センター

〒330-8503 さいたま市大宮区天沼町1-847 TEL.048-647-2111(代) FAX.048-648-5166 <https://www.jichi.ac.jp/center>